中島 イソ子（絵画）

ISOKO NAKAJIMA（PAINTING）

1940年　沖縄県名護市生まれ。
1962年　武蔵野美術学校（現武蔵野美術大学）を卒業。
山原の自然の風景や身近な人物を描いていたが、
以後、日記のように沖縄への自身の思いを投影した自画像がテーマとなる。

主な展覧会に、「中島イソ子展 －なぜ自画像か－」（前島アートセンター、2001年）
「Art is My life －沖縄の女性アーティスト」（沖縄県立博物館・美術館、2012年）
「琉球の横顔　描かれた『私』からの出発」（沖縄県立博物館・美術館、2021－22年）
「沖縄を見つめた表現者たち展」（佐喜眞美術館、2024年）がある。

戦後沖縄の女流画家としての黎明期を築き、
沖縄の美術界への貢献は多大である。
現在、沖展会員。

公共コレクション：沖縄県立博物館・美術館、
那覇市、佐喜眞美術館、沖縄タイムス社



真喜志 民子（染織）

TAMIKO MAKISHI（DYEING AND WEAVING）

1941 年、沖縄県那覇市生まれ。
1963 年、女子美術大学短期大学造形美術科を卒業。
苧麻織や紅型を学び、以後、生活に息づくように
自身の染織の世界を追求し、墨染織を展開する。

1986 年から 96 年に渡り沖縄にて「ファブリケーション・布との対話」を企画出品。
1996 年より、札幌、松本、金沢、東京、名古屋、京都、倉敷、鹿児島等、
全国のギャラリーにて個展を多数こなす。
2010 年にはその集大成として、
岐阜現代美術館で大規模な個展「真喜志民子 墨・染・織」を開催。

夫である画家の真喜志勉とは、
2001 年「真喜志勉・民子 耳順展」を皮切りに、
2014 年まで 6 回 2 人展を開く。

沖縄での初個展は 2021 年、那覇のギャラリー RENEMIA にて。
今後も多数の展示予定がある。



松島 朝義（陶芸）

CHOGI MATSUSHIMA（POTTERY）

1947年、八重山生まれ、那覇育ち。
大学卒業後に喜名焼の窯と出会い、
以後、師や産地といった背景を持たず
独学で「琉球南蛮」という独自の世界を切り拓く。

1978年に首里で登窯を築き、
1982年以降は移転した恩納村の穴窯で焼成を続ける。
1976年の初個展以後、数多くの個展を開催。

公募展では、1981年「沖縄現代陶芸展」（琉球新報社主催）で
受賞の後に審査員を勤め、
1997年「ビエンナーレ雄樹陶公募展」（岡山県主催）奨励賞
2000年「西日本陶芸美術展」（西日本新聞社主催）大賞受賞
2003年「長三賞陶芸展」（常滑市主催）で奨励賞受賞
同年、沖縄県で陶芸部門初となる日本工芸会正会員に選出

「琉球王国文化遺産集積・再興事業」（沖縄県、2015－21年）に関わり、
模造復元事業にも携わる。



儀保 克幸（彫刻）
KATSUYUKI GIBO（SCULPTURE）

1967年、大阪府生まれ。
1990年、東京造形大学美術Ⅱ類（彫刻）卒業。
以後、木彫での人物表現に目覚め、
近年は活動拠点を沖縄に移し、制作を続ける。

主な展覧会に、『海の名前の少年』（清州アートスタジオ、2015年）、
「第3回クロスカレント・テキサツ展」（ウイチタフォールズ美術館、2016年）、
「邂逅の海」（沖縄県立博物館・美術館、2017年）、
「沖縄アジア国際平和芸術祭2020」（沖縄2020年）、
「はじまりの森 クサティムイ～おいでおいで、がじゅまるのもり～」
（那覇文化芸術劇場なはーと、2022年）、
「復帰後－私たちの日常展」（佐喜眞美術館、2022年）、
「『○でも×でもないもの！』～『ARTと私』正解のない『教育普及』展～」
（沖縄県立博物館・美術館、2024年）など。

2023－2025年、首里城正殿彫刻物復元事業に参加し、
現在、沖縄県立芸術大学非常勤講師。

仲嶺：ご自身の生まれ育ちについてお聞かせいただけますか？

儀保：生まれたのは大阪で。両親は沖縄の南風原にある津嘉山出身で、戦後の出稼ぎで大阪へ渡り、そこで見合い結婚したそうです。

仲嶺：ご両親の沖縄戦の記憶についてお聞かせください。

儀保：父が1941年生まれ。母は終戦生まれだから1945年かな。父は家から南の方に逃げていった時の記憶、当時4歳ぐらいだったと思うけど景色や匂いを結構鮮明に覚えてるって言ってました。夜中に移動しながら途中、お父さんとおじいさんがやられて、それから白梅の塔がある糸満市真栄里あたりの部落で捕まったそうです。うちの母は戦後生まれなんでサイパンに疎開してて、戦後そこから沖縄に戻ってきたって話してました。父は年を取るにつれて、昔の出来事を語ることが増えました。

仲嶺：大阪での生活や、差別的な経験についてはいかがでしたか？

儀保：差別というよりは、「きつい仕事しかなかった」って言ってたね。肉体労働しかない。要は給料の良い仕事っていうのは学問がないといけない。沖縄から来てるから、一番きつい仕事だけがあって。うちの親父はその中でも一番きつい仕事をして、お金を稼いだって言ってた。小っちゃい頃覚えてるんだけど、三輪トラックに乗ってコークス運搬してたんです。父親が運転していて、自分も小さい時はよくそのトラックの後ろに乗せられて、一緒に夜中に出発して1日かけて帰る、みたいなのをやってたから、大阪は、全てが灰だらけで錆びた工場やトラックの煤けた匂い。その頃の記憶は結構ある。

仲嶺：お父さんとお母さん、とても忙しかったんですね。

儀保：もうとにかく働いてた。5歳くらいの時に3歳の妹と二人でよく留守番もしてた。お菓子だけ渡されて。今思うと大変な環境だったと思うけどそれが楽しかった。

仲嶺：幼い頃から絵を描いたり、ものづくりをしたりすることに興味がありましたか？

儀保：うちの母が絵が好きで得意だったみたいで。家も自分たちで建てたらしいんですけど、それで母親がキリンとか動物の絵を家に描いていたのは覚えている。結構得意みたい。子供の時もいろいろ絵の描き方とか教えてもらってた。それがきっかけなのか、小学校1年生の頃から絵画コンクールとかに出してて、賞を取ったりしてましたね。

仲嶺：日常的によく絵を描いてましたか？

儀保：学校で、賞を獲ってから「絵が得意だ」と思って、誕生日は絵を描く道具か、プラモデルかどっちか。とにかく「作る」「描く」のが好きだった。絵を描いているときは、よく時間も忘れて、日も暮れて、真っ暗な中で絵を描くなんて事も、しょっちゅうあった。子供の頃は、一人で妄想して遊ぶのはとても楽しかった。

仲嶺：小さい頃からそういう経験があって、大学は美術の道に進みたいと思っていたんですね。

儀保：そうね。当時はどちらかというと漫画とかが好きで、漫画家かイラストレーターになりたいなと思ってて。高校生の頃、最初は琉大（琉球大学）の美術工芸科に行って、美術の先生かデザインの仕事かどっちかだと思ったんだけど、沖縄に新しく美術専門の大学（沖縄県立芸術大学）ができるって聞いて、最初は実は芸大のデザイン科を受けました。

仲嶺：それでどうでした？

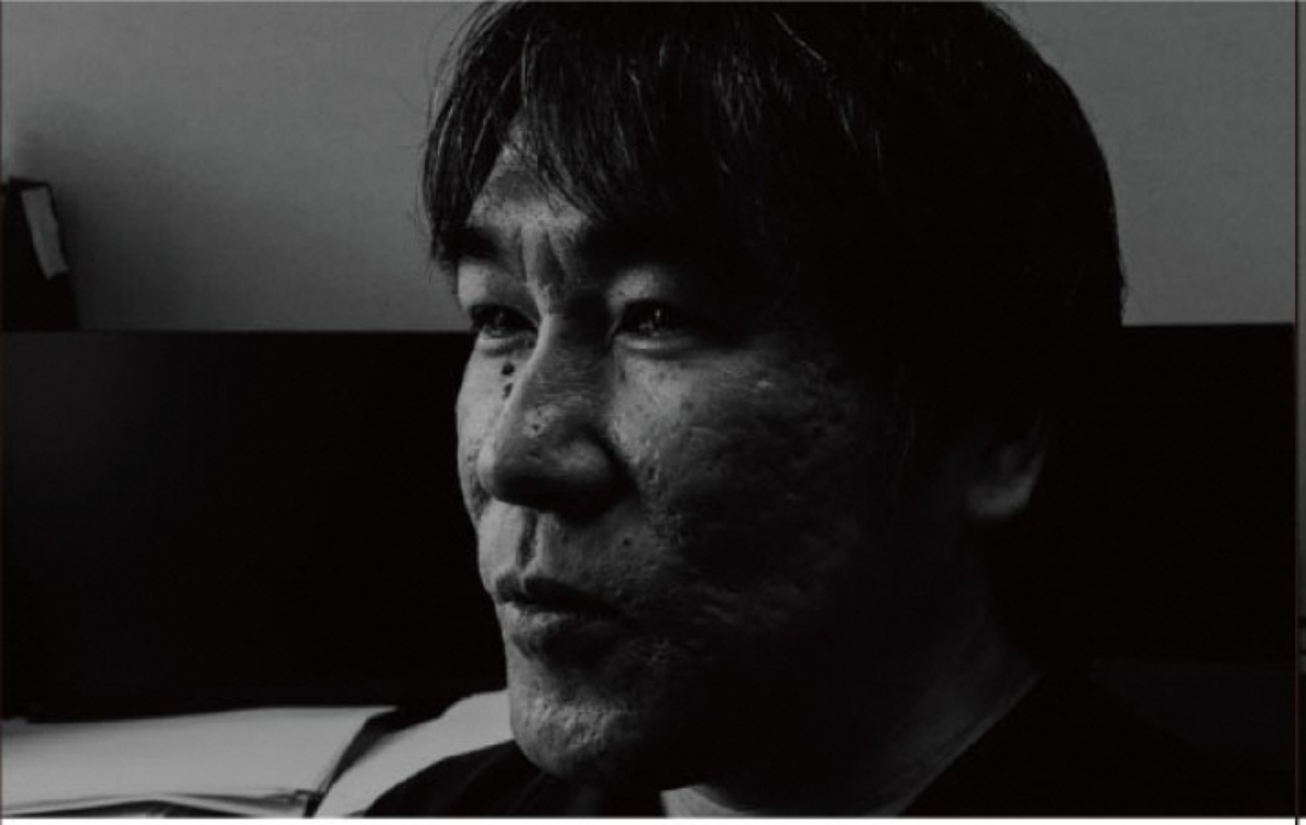
儀保：落ちちゃったんですよ。それで次の年、また芸大チャレンジしようと思ったんだけど、今度は受験票を出すの忘れて。「人生終わった」と思ったね。もう浪人は嫌だったから、まだ願書が出せる美術大学を探して、多摩美（多摩美術大学）の日本画と、造形大（東京造形大学）の彫刻を受けて、内地の大学を目指しました。本命の多摩美は落ちちゃったけど、造形大学に補欠で入学する事が出来ました。

仲嶺：浪人中に塾は行ってましたか？

儀保：浪人中は南風原高校で、美術教師で恩師の喜納盛勝さんに、デッサン習っていました。

仲嶺：彫刻科はどうでした？何名くらいいましたか？

儀保：造形大学の彫刻専攻には一学年35人ぐらいいたんですよ。すごい大所帯。造形大は裸婦の彫刻を4年間しっかりやる大学で。制作する場所取りとかが、結構大変だった。





大山 健治（映像）
KENJI OYAMA（VIDEO）

1971年 沖縄県那覇市生まれ
1997年 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了

大学時代からインスタレーションに興味を持ち始め、
次第に映像を取り入れたインスタレーション作品を展開。

主な展覧会は、「OKINAWA ART in NewYork 展」
（日本クラブ / ニューヨーク、2012年）
「SHASHIN: PHOTOGRAPHY FROM JAPAN」
（New York Public Library / New York、2015年）
「さどの 島銀河芸術祭 2018」（新潟、2018年）
「REFLECTIONS 時代を見る眼」特別展示
（沖縄県立博物館・美術館、2022年）
令和5年度 第2期常設展「オマージュ・琉球漆器」
（浦添市美術館、2023年）
「Film of Light 光の膜 OYAMA Kenji Exhibition」
（浦添市美術館、2024年）

現在、沖縄国際大学准教授。

仲嶺：まずは自己紹介をお願いします。どこで生まれ、どこで育ったのでしょうか？

大山：生まれは那覇です。実家が前田のすぐ近くでした。父は竹富島出身なんですよ。戦後生まれの世代です。

仲嶺：大山さんと美術との出会いは、いつ頃に遡るのでしょうか？

大山：小さい頃から絵を描くのは好きだったのですが、小学校の担任の先生がきっかけでした。吉田先生という女の先生で、ご自身も趣味で絵を習っていて、それが画家の山城見信さんの絵画塾だったんです。「絵が好きな子がいるから」と紹介してくださり、家も近かったので通い始めました。

仲嶺：見信さんの絵画教室はどのような雰囲気でしたか？

大山：とてもごちゃごちゃした教室で、アカデミックな教育は一切しないんですよ。「デッテンをしましょう」というよりは、自由に好きなものを描かせるという方針でした。世代もバラバラな人が通っていて、隣では歯ブラシで絵の具をドローイングしている大人がいたり。最初は静物画を描いていましたが、見信さんは突然来て「もっとよく見なさい」とだけ言って去っていくような方でした。

仲嶺：何年くらい通われたのですか？

大山：正確には覚えていないのですが、一度サボって見信さんに本気で怒られたことがあります。小学生相手にも本気で怒るんですよ。怖かったですが、同時に子ども扱いしない人なんだと感じました。あの時、「自分ときちんと向き合ってくれている」と感じたのはよく覚えています。同時期に美術家の照屋勇賢さんも通っていました。

仲嶺：中学生になっても絵は描き続けていましたか？

仲嶺：その後、開邦高校の芸術コースへ進学されます。その頃にはもう芸術系の学校に行きたいと考えていたのでしょうか？

大山：はい、自分の好きなことをもっと勉強できる場所に行きたいと思っていました。ちょうど、できたばかりの学校だったので。デザイン科とかではなく、漠然と「自由に絵が描ける環境に行きたい」というイメージでしたね。

仲嶺：高校に入ってからはどうでしたか？

大山：とても自由な雰囲気でしたね。離島からも生徒が来ていて、色々な個性を持った人たちが集まっていました。まだ2期生だったので校舎も新しく、生徒数も少なかったので、少しガランとした感じでした。美術室の道具もまだ揃っていなかったのを覚えています。城間喜宏先生が実技を担当し、翁長直樹先生が理論を担当されていました。翁長先生の美術職員室にはみんな入り浸っていましたね。

仲嶺：翁長先生からはどのような影響を受けましたか？

大山：具体的な描き方を教えるというよりは、「こんな美術があるよ」「こういう作家がいるよ」といった面白い話や、海外の美術を紹介してくださいました。デザインや彫刻、建築系の図面なども一通りやりましたが、その中でも絵画が一番自由に表現できると感じました。油絵を描くというより、「描ける」こと自体が好きだったんです。

仲嶺：影響を受けた作家はいらっしゃいますか？

大山：当時は特にいないと思っていましたが、翁長先生の勧めでルネ・マグリットの作品に出会い、授業で発表した記憶があります。高校生の頃、全国高校生が集まる総合文化祭で県の代表になり、岡山へ作品を展示しに行きました。その時、翁長先生に誘われて岡山の大原美術館に行き、それが私にとって初めての美術館体験でした。西洋絵画から現代美術まで、たくさんの作品を鑑賞し、沖縄ではなかなか見られない本物の芸術に触れる貴重な機会でした。

仲嶺：ご両親は、大山さんが美術の道へ進むことに何か言われてましたか？

大山：特に何も言われませんでしたね。兄弟は音楽をやっている人が多かったのですが、私だけ美術でした。家に笛や太鼓、三線などが置いてあり、父は竹富島で民謡や舞踊を習得していました。祖父も竹富島の狂言の継承者で、県の文化功労賞も受賞しています。口伝えで伝承されているセリフの言い回しや踊りがあるようでした。

仲嶺：大学に入ってからはどうでしたか？

大山：大学に入って自分の創作を掘り下げていく中で、自分の作品とアイデンティティ、特に美術史との関係に疑問を持つ時期があったんです。それまでの美術と自分の表現を照らし合わせた時、自分がどう進むべきか分からなくなって。そこで「美術史を勉強しないと」と思ったのをきっかけに、よく古本屋巡りをしていました。他の学生が黙々と作品を描く中、私は逆で、美術史を勉強して自分の表現のあり方を見つめ直そうとしました。現代美術から10年ずつ遡って、戦前の日本の美術やアメリカの美術まで調べました。

仲嶺：大学ではどのような先生に師事されましたか？

大山：大学では、特定の先生というより、版画やリトグラフ、絵画の保存修復など、それぞれの授業で様々な先生に教わりました。大学院に進む時に、榎倉康二先生の研究室に入りました。

仲嶺：卒業制作では、どのような作品を作られましたか？

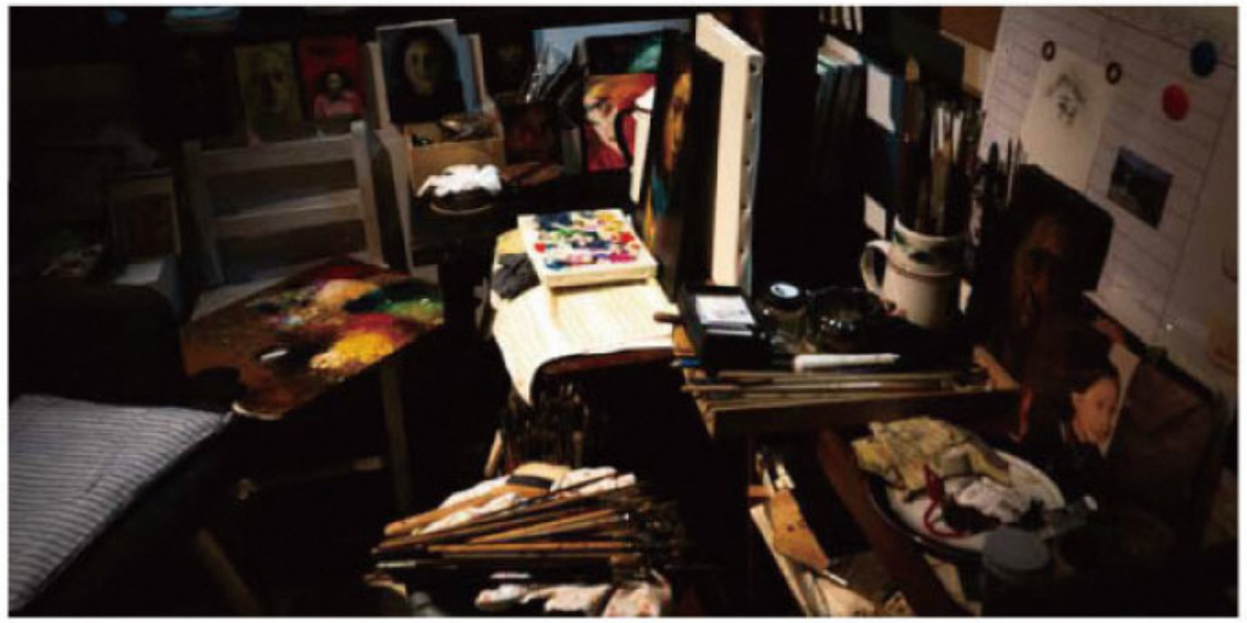














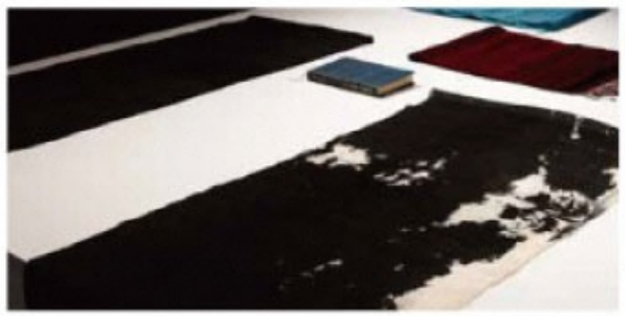


展覧会場 EXHIBITION

中島 イソ子 ISOKO NAKAJIMA

















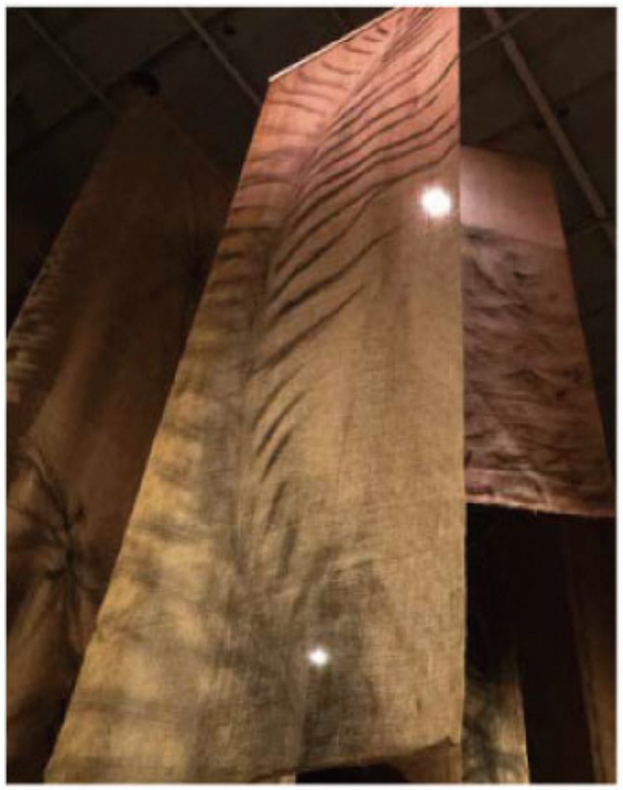


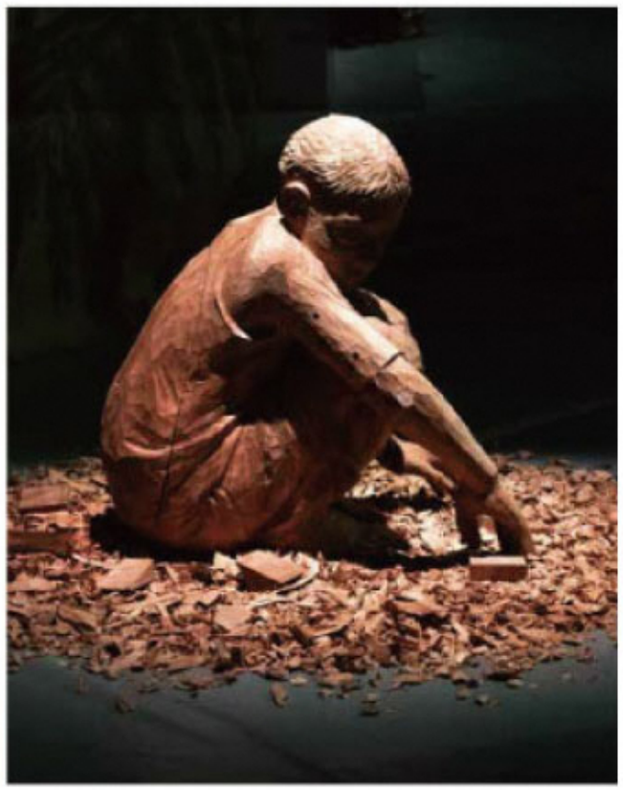


真喜志 民子 TAMIKO MAKISHI

松島 朝義 CHOGI MATSUSHIMA















儀保 克幸　KATSUYUKI GIBO

大山 健治　KENJI OYAMA

図録は、なはーと窓口にて販売中です。

＊窓口営業時間 10 時～19時、休館日（第1・3月曜日）を除く

＊なはーと窓口以外でのご購入については、下記までお問合せください。

《お問い合わせ》

那覇文化芸術劇場なはーと 企画制作グループ

TEL：098-861-7810

メールアドレス： kikaku-nahart@city.naha.lg.jp